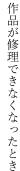


Title	作品が修理できなくなったとき
Author(s)	福元, 崇志
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 136-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



去の遺物として後世にのこすため、いつかおとずれる物理的な死は、いつまで 品にもあてはまるだろう。そのとき問題となるのは、寿命をまっとうした作品 とになる。修復が修理・交換にとってかわられるこの事態は、数多くの映像作 寿命にあらがえない作品の存在が目立つようになってきた。たとえばダン・フ 強制)する場、とりわけ現代美術を扱う美術館という場にあって、このところ、 な死をめぐる問いに直面している。 るべきか、それとも文字どおり死蔵するべきか。美術館はいま、作品の物理的 の取り扱いである。故障した亡骸を、失われた文化の痕跡としてなおも公開す の生産が打ち切られたとき、作品は交換部品を調達できず、早晩死を迎えるこ レイヴィンの、蛍光灯をもちいた彫刻。世の照明がLEDへと移行し、蛍光灯 も回避されつづけなければならない。だが、こうした永遠の生を約束(ないし 美術館において、作品はあたうかぎりの延命処置をほどこされる。作品を過

国立国際美術館研究員。専門はドイツと日本の近現代美術。 福元崇志(ふくもと・たかし)

